

植民地支配が迫った技術選択

——バイダルカに刻まれた露米商会の経営——

Choice of Technology Enforced on Colonialism
The Employment and Production of Aleut *Baidarka* Under the Control on
Russian-American Company

大西 秀之

ÖNISHI Hideyuki

要 旨

本稿では、函館市北方民族資料館に展示されている中部千島シムシル島収集のカヤック型皮船「バイダルカ (Baidarka)」を対象として、同資料が製作・使用された歴史的背景を検討する。とくに、そこでは、造船技術や操船技術などといった技術的实践を復元するなかから、同資料の製作や使用に影響を及ぼした帝政ロシア期の露米商会 (Russian-American Company) を中心とする植民地支配のあり方を追究する。

同資料の形態と構造を検討した結果、その製作や操船にかかわる技術選択や技術的实践のあり方の一端を窺い知ることができた。そして、そうした技術選択は、露米商会に代表されるロシアの植民地支配によって、アリュートが毛皮交易品生産を目的とした特定の小型海獣の狩猟に従事させられるとともに、アリュート社会において長距離移動の必要性が低下した結果である、という想定が導かれた。このような結果から、同資料の船体の形態や構造は、単に環境適応や文化伝統などによるもののみならず、露米商会などに代表されるロシア帝国主義による植民地経営の影響を受け選択されたものである、という可能性を窺い知ることができた。

くわえて、本稿では、造船や操船にかかわる技術的实践を徹底的に人間の身体活動として読み解くことによって、従来、巨視的に語られがちであった植民地経営や帝国主義などの影響を、それを製作・使用した人びとが置かれていた社会状況や生活形態を反映する個人の実践として捉えることができた。このため、ここで明らかにした結果は、民具という非言語資料を対象として、単なるモノとしての資料の特徴でも、それを生み出した抽象的な制度でもなく、当該社会の人びとが植民地支配に強いられた社会的実践の一端を読み解いたものと認識することができる。そういった意味で、本稿の成果は、人類学が切り開くことができる新たな歴史研究のフロンティアとともに、長らく人類学が等閑視してきた民具研究に秘められた可能性を提示したといえる。

【キーワード】 アリュート、カヤック型皮船、毛皮交易、造船／操船技術、非言語資料

1. モノに刻み込まれた歴史

西欧諸国による植民地主義が被植民地に及ぼした影響は、当該社会を調査対象とする人類学にとって一貫して重要なテーマであり続けてきた。というのも、人類学は、その形成期から植民地支配の影響を受け、「文化変容」した社会を対象としてきたからにはほかならない。もっとも、欧米の民族誌家や人類学者が当地に赴いていることこそが、皮肉にも植民地支配が及んでいる結果そのものであるならば、現地の社会なり文化を理解しようとする限り、植民地主義の影響を勘案することは必然的に不可避となるだろう。

しかし、植民地主義の影響を読み解くことは、民族誌フィールドにおける参与観察に立脚する人類学にとって必ずしも簡単なことではない。なぜなら、その方法論に忠実であろうとする限り、現地社会での——民族誌家としての——個人的な実体験という限定的な情報から、グローバルな政治経済的な歴史事象としての植民地主義にアプローチしなければならないからである。

むろん、世界システムとしての植民地主義の発露は、法令の条文や経済統計の数値のみならず、本来、現地の人びとの日々の営みのなかにこそ、その実態がありありと窺われるはずである。また、そうした生活実践のなかでの解明こそが、民族誌調査に求められる役割といえる。とはいえ、人類学が対象としてきた社会の少なからずが、自己の歴史記録を自ら文字史料として遺してこなかったことを想起するならば⁽¹⁾、民族誌家は現地の人びとが発する、その場その時の語りに頼らざるをえず、そこから植民地主義のみならず外部の歴史展開を読み解くことは容易ではない。また仮に、なんらかの歴史を読み解いたとしても、その正統性を保証することが非常に困難となる。

とすると、人類学にとって植民地主義の検討は、歴史家に委ねるか、さもなければ自らが文字史料を読み解くか、どちらかの選択肢しかなく、独自の方法によって行うことはできないのであろうか。この問いに対し、本稿では、人類学が採りうるアプローチのひとつとして、非言語資料である民具を対象とした歴史分析を提示する。

具体的には、過去に現地で生活財として使用されていた民具資料の製作・使用・廃棄にかかわる、当該社会の人びとの社会的実践を復元するなかから、そこに刻み込まれた植民地主義の影響の読み解きを試みる。民具資料を取り上げる理由は、それが現地の人びとが日常生活のなかで使用しているものであるため、まさに民族誌家として人類学者が民族誌フィールドで対峙しうる研究対象だからにはほかならない⁽²⁾。

いっぽう、民具資料による植民地主義へのアプローチは、コトバではなくモノによる歴史の再構築となるため、必然的に既存の歴史研究とは異なる側面を明らかにしうる可能性を孕んでいる [大西 2003 : 17]。また仮に、文字史料などのコトバによって構成された既存の歴史理解と、同じ結果が導かれたとしても、それはそれでモノを対象とした異なるアプローチによっても既知の理解が裏づけられた、ということで十分意義があるだろう。さらに付言するならば、こうしたアプローチは、ひとり歴史研究のみならず既存の人文・社会科学に幅広く浸透している「言語中心主義」に対するアンチテーゼともなりうる [大西 2007 : 38-39 ; 2009 : 163-170]。

以上のような意義を踏まえ、本稿では、函館市北方民族資料館に展示されている中部千島シムシル島収集のカヤック型皮船「バイダルカ (Baidarka)」を対象として、同資料が製作・使用された歴史的背景を検討する。とくに、そこでは、造船技術や操船技術などといった技術的实践を復元するなかから、同資料の製作や使用に影響を及ぼした帝政ロシア期の露米商会 (Russian-American Company) を中心とする植民地支配のあり方を追究する。

2. 北方民族資料館のバイダルカ

函館市北方民族資料館には、世界の人類学・民族学系博物館のコレクションのなかでも希少な、三連座のバイダルカが展示されている（写真1）。同資料は、市立函館博物館が所蔵しているものであり、1875（明治8）年に中部千島シムシル島で収集されたと推察されている〔長谷部 2003：161-162〕。

植民地主義との関係で述べるならば、同資料の収集・所蔵の来歴そのものが、北東アジア地域での植民地支配をめぐる近代日本と帝政ロシアの政治史に由来している、といっても過言ではない。というのは、同資料が、1875（明治8）年に日露が交わした千島樺太交換条約によって、千島列島全域が日本領と確定されたことを受け実施された、開拓使長官の黒田清隆による巡検に際して収集されたものだからである⁽³⁾。

くわえて、同資料は、まず開拓使東京仮博物場で展示された後、1884（明治17）年に函館県第二博物場に移管・展示され現在に至っている〔長谷部 2003：161〕（写真2）。このため、同資料は、近代日本の北方開拓という植民地主義的な領土拡張の象徴として収集され、眼差されてきた、と見なすことができる。

しかし、同資料と植民地主義の関係は、博物館にコレクションされた経緯にとどまるものではない。それは、この一艘の皮船が、植民地経営の一環として行われ近代の世界システムを形成するに至った毛皮交易〔cf. Oswalt 1980；Crowell 1997；岸上 2001；下山 2005〕に、その存亡を翻弄された先住民の歴史をダイレクトに反映しているからである。

まず、中部千島シムシル島で収集された——と想定される——同資料は、開拓使関係文書の研究から、アリューシャン列島の先住民であるアリウト（Aleut）⁽⁴⁾によって製作されたものと長らく措定されてきた〔e.g. 馬場 1943〕。ひとまず、その是非は置くとしても、アリウト製と措定された理由は、ひとえに彼ら彼女らが故地であるアリューシャン列島から遠く離れた中部千島のシムシル島に居住していたためである（図1）。この移住は、自発的なものではなく、1829年以降、帝政期のロシアの国策会社である露米商會が、卓越した海上での狩猟技術を有するアリウトを、ラッコ猟などの毛皮狩猟に従事させるため、北千島のシムシユ島や中部千島のウルップ島などとともにシムシル島に移住させた結果である〔Fedoroba 1973：205；大矢・洲澤 2013：11〕⁽⁵⁾。また、こうした移住政策は、単に毛皮交易という経済活動のみならず、日露が争っていた千島列島の領有権も、その策定に少なからず影響していた可能性がある。

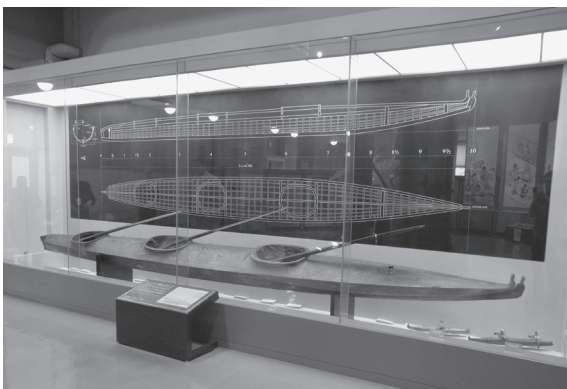


写真1 函館市北方民族資料館展示バイダルカ



写真2 函館県第二博物場での展示
出典：〔大矢・洲澤 2013：10〕

図1 アリューシャン列島と千島列島



そういった意味で、黒田清隆の千島巡検に際して収集された同資料は、極めて植民地的支配状況を反映したものといえる。さらには、前述のようなロシアの植民地政策が背景にあったからこそ、この皮船が収集されたのではないか、という推察も成り立つ [手塚 2011: 156-157]。いずれにせよ、同資料は、純粋な博物学的な関心からではなく、多分に政治的な意図を孕んだ巡検のなかで収集されたことは疑いのない事実である。

ところで、露米商会によって北千島や中部千島に移住させられ、毛皮狩猟に使役されたのは、アリュートだけではなく、コディアック島の先住民であるコニアグ・エスキモー (Koniag Eskimo)⁽⁶⁾ も含まれていた。このことは、同地域のエスニシティの同定に混乱をきたすこととなり、現在まで「コディアック島のアリュート」や「コディアック・アリュート」などの表現が使用されている [大矢・洲澤 2013: 10-11]⁽⁷⁾。くわえて、北千島や中部千島のアリュートやコニアグ・エスキモーは、当地の先住民である千島 (クリール) アイヌとともに、露米商会の管理下で組織的な海獣狩猟に従事させられていた。

以上の状況を考慮するならば、同資料の製作者は、にわかにはアリュートとは特定できなくなる。というのも、コニアグ・エスキモーも、同様な皮船の製作技術を有していたからである [cf. Heath 1987; 大矢・洲澤 2013]。さらに付言するならば、それを使用して毛皮猟に従事していたのは、アリュートやコニアグ・エスキモーらの移住者だけでなく、千島 (クリール) アイヌも含まれていた可能性も否定できなくなる。

これらの課題に対し、カヌービルダーとしての観点から同資料を詳細に調査・分析した洲澤育範は、その形態・構造や製作技術はアリュートのものである可能性が高い、との判断を下している [大矢・洲澤 2013: 12-15]。ただし、洲澤は、アリュートのバイダルカ製作技術によってコニアグ・エスキモーが製作した可能性も否定できない、との見解も同時にしめしている [大矢・洲澤 2013: 15]。

なお、同資料の最大の特徴である三連座も、ロシアの植民地支配によって製作されたものである。アリュートのバイダルカは、本来、ハンターが一人で乗り込む単座か、荷物の運搬や熟練ハンターが未熟練者と乗り込み狩猟に赴くための複座のものであった [Jochelson 1933: 55; Oshima 1996: 88]。これに対し、三連座のバイダルカは、中央にロシア人の植民地行政官などを乗せ、もっ

ばら前後に乗ったアリュートがパドルを漕いで海上を移動するものであった [ラフリン 1986 : 70, 230-231]。このように、同資料は、ロシアの毛皮商人の到来後、植民地支配が進展するなかで必要とされ、製作された賜物にほかならない。

3. バイダルカの形態と構造

函館市北方民族資料館の中部千島シムシル島収集の三連座のバイダルカは、それ自体が帝政ロシアによる毛皮交易などの植民地経営を反映したものであった。もっとも、こうした見解は、文献史料に基づく既存の歴史研究から導かれたものであり、純粋に民具資料そのものの分析・検討から得られた成果ではない。

これに対し、以下では、あくまでも民具資料としてのバイダルカの諸属性を分析・検討するなかから、同資料を製作・使用した背景に控える植民地支配へのアプローチを模索する。とくに、ここでは、ロシアによる植民地経営の影響の読み解きを射程に入れ、造船技術と操船技術に焦点を当て、同資料の製作と使用の技術的側面を分析・検討する。このような目的の下、具体的には、同資料の船体形態や船体構造を中心に、全体から部分にかかわる技術的特徴の追究を試みる。

なお、本稿の基となった調査は、2010年3月に北米先住民のカヤック・カヌーの復元研究を行っている洲澤育範と共同で実施したものである。同調査では、造船技術あるいは操船技術などと船体構造の関係について意見交換を行った。もっとも、筆者は、カヤックやカヌーに関してまったくの素人である。これに対し、洲澤は、自身がカヌービルダーでありカヌーイストでもある。このため、同資料の造船技術や操船技術に関する分析は、全面的に洲澤の知識や視点に依拠したものとなっている⁽⁸⁾。

1) 船体形態

同資料の船体形態を一言で表すならば、細長く幅が狭い、という表現を誰しもが選択するのではないだろうか。つまり、同資料は、船長に比して船幅が極端に狭いプロポーションを呈している、という特徴が指摘できる (図2)。この特徴は、同資料のみに限定されたものではなく、アリュート製のバイダルカに共通するものであり、またコニアグ・エスキモーやチュガッチ (Chugach) が製作したバイダルカと比較すると、その傾向を顕著に確認することができる [大矢・洲澤 2013 : 12, 14] (表1)。

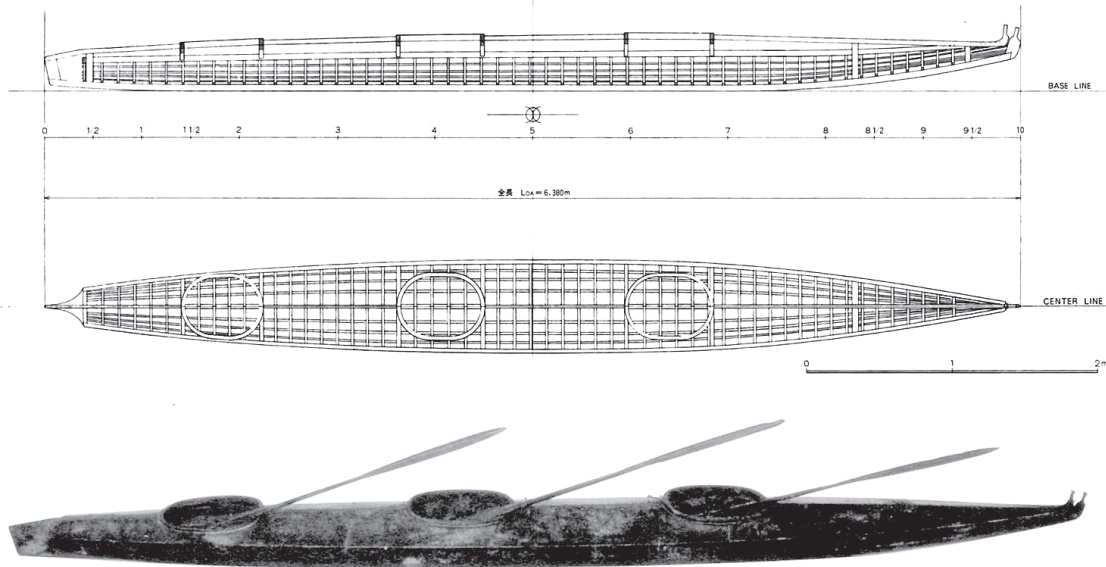
こうしたアリュート製バイダルカの船体形態は、海上での安定性よりも、海上航行の速度を上げることに適したものである。換言するならば、安全性を犠牲にして、スピードを優先した形態といえる。ここから、同資料を含めたアリュート製バイダルカは、明確に目的が定まった短距離ならば高速で移動できるためアドバンテージを発揮するが、天候や潮流の変化への対応が難しいことから長距離を安全に航海することには適していない、との推察が成り立つ。

2) 船体構造

同資料の船体構造は、一般にアリュート製バイダルカの特徴とされる、キール (竜骨) を中心としたフレーム構造材によって製作されている [大矢・洲澤 2013 : 13]。とくに、アリュート製バイダルカのキールは、二~三分割されるパーツで構成されており、それらが削ぎ継ぎで接合されている [ラフリン 1986 : 70-71]。

上記の構造は、柔軟性を高め、外部からの衝撃が加わったとしても、一点に集中するのを防ぎ、

図2 バイダルカのプロポーションと船体構造



出典：[長谷部 2003：158]

圧力を分散させることを目的としたものである [ラフリン 1986：71]。この構造によってアリュート製バイダルカは、海上で荒波を受けても、キールの破損を回避することができる。

他方、同資料は、舷縁（ガンネル）材が船首と船尾の部材に直接接続されていない [大矢・洲澤 2013：13]。また、船首部は、キールと一体になった下部と、その上に接合された上部からなる、上下別々のパーツ構成となっている [大矢・洲澤 2013：13] (写真3)。こうした構造も、キールの二～三分割接合と同様に、外部からの衝撃を分散させ破損を防ぐ工夫と想定される。

以上のように、同資料を含むアリュート製バイダルカは、キールおよび船首や船尾のフレームが、複数のパーツが組み合わせられた分割構造となっており、船体前後側の衝撃や揺れに対する対処がなされていた。したがって、アリュート製バイダルカは、船首あるいは船尾が波や風などの衝撃・圧力を受けたとしても、その力が一箇所に集中せず分散され船体の破損や転覆の危険性を低減させる構造となっている。

これに対し、同資料の船体両側面の船腹には、波風に対する特別な仕組みが施されていない。横方向からの衝撃・圧力に対処する、同資料の構造としては、デッキ・ビーム（甲板梁）が補強の役割を果たす程度である (写真4)。くわえて、形態の検討で指摘したように、同資料は、船長に比して船幅が極端に狭いプロポーションとなっているため、横方向からの力を受けると簡単に転覆してしまう危険性を多分に孕んでいる。この結果、同資料は、船首・船尾に対する前後からの圧力・衝撃には柔軟性を有するものの、左右船腹側からの衝撃・圧力に対しては相対的に脆弱な造りとなっている。

表1 アリュート製とコニアグ・チュガッチ製の船長・船幅比

所蔵館	アリュート様式				コニアグ・チュガッチ様式		
	市立函館博物館 (本稿対象資料)	カリフォルニア大学 パークレー校付属 ローウィ博物館	オレゴン 州立博物館	スミソニアン 国立自然史 博物館	デンマーク 国立博物館	ワシントン 州立歴史 博物館	ビョートル 大帝記念 人類学・ 民族学博物館
船長	638.0 cm	581.4 cm	617.2 cm	701.0 cm	434.0 cm	596.2 cm	807.0 cm
船幅	37.4 cm	43.2 cm	57.5 cm	63.5 cm	65.6 cm	75.0 cm	79.2 cm
比率 (幅：長)	1：17.1	1：13.5	1：10.7	1：11.0	1：6.6	1：7.9	1：10.2

出典：[大矢・洲澤 2013：12] (一部改変)

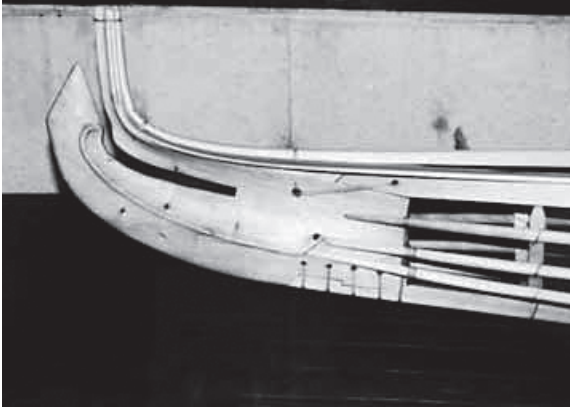


写真3 船首部の構造 出典：[大矢・洲澤 2013：13]

写真4 船腹部の構造とデッキ・ビーム
出典：[大矢・洲澤 2013：13]

こうした船体構造から、同資料は、前後から受ける力は船体そのものの造りで対処できるものの、側方から受ける力に対しては操船者の技能によって転覆や破損などの危険を回避せざるをえないことが指摘できる。換言するならば、アリュート製バイダルカは、破損や転覆などの危険を及ぼす波風の影響に対して、前後方向から受ける力には造船技術によって、側面方向から受ける力には技能として操船者が身に付けた操船技術によって、それぞれ対処することを前提とした造りだと想定できる。

3) コックピットの形態・構造

コックピットは、同資料の最大の特徴のひとつである。前述したように、三連座のバイダルカは、ロシアの影響が及ぶなかで製作されるようになったものであるため、そのものが植民地支配を反映しているといえる。

ところで、同資料のデッキ上面の「乗り口」の形態は楕円形を呈しているが、こうした形態はアリュート製バイダルカに観察される特徴である [大矢・洲澤 2013：14]⁽⁹⁾。また、アリュートは、「投げ足（伸膝）」の姿勢でバイダルカに搭乗し操船する [Jochelson 1933：11] のに対し、コニアグ・エスキモーやチュガッチは、「正座」の姿勢で搭乗し操船する。この違いは、コニアグ・エスキモーの搭乗・操船姿勢を見たアリュートが、それを揶揄した記録があることから [ラフリン 1986：57]、明確に自覚されていたことが確認できる。

なお、「投げ足（伸膝）」の搭乗・操船姿勢は、子ども時代からの長期間の訓練に基づくものであり [ラフリン 1986：56-57]⁽¹⁰⁾、まさに文化的に形成され条件づけられた「身体技法」[cf. モース 1976；Kawada 1991；川田 1992] と見なすべきものといえる。これを裏づけるように、ロシア人は、アリュートと同じようにはバイダルカに座ることができなかった、という民族誌記録が遺されている [Veniaminov 1984：160]。

いっぽう、同資料のコックピットの構造からは、極めて興味深い特徴が捉えられた。それは、デッキ・ビーム（甲板梁）が均等に配置されていたことである。

アリュートの格言として、「カヤックがアリュート人の体に合うように作られたのか、アリュート人の体がカヤックに合うようにできたのか、知る人はいない」[Veniaminov 1840：16；ラフリン 1986：53] という語りがある。この格言がしめすように、アリュートのバイダルカは、通常、特定個人が自らの身体に合わせて製作される [Lantis 1984：173；ラフリン 1986：61]。とすると、デッキ・ビーム（甲板梁）も、当然、各個人の身体に応じて配置されるはずである。なぜなら、たとえ同じ船長や船幅に、前述の「投げ足（伸膝）」の姿勢で搭乗したとしても、個々人の足

の長さや膝の位置は違うため、配置によってはデッキ・ビーム（甲板梁）が邪魔になる可能性が大いにあるからだ。

にもかかわらず、デッキ・ビーム（甲板梁）が均等に配置されていることは、同資料が特定の個人のために製作されたものではなく、不特定多数の人物が搭乗することを前提に造られた可能性を窺わせるものとなる。換言するならば、同資料は、ある特定個人を対象としてオーダーメイドされたものではなく、不特定多数の人物が搭乗・操船するためのレディーメイドだったのではないか、という推測である。

4. 植民地経営による技術選択

函館市北方民族資料館展示のアリュート製バイダルカを対象として、その形態と構造から造船技術や操船技術を検討した。その結果、同資料の製作や操船にかかわる、技術選択や技術的実践のあり方の一端を窺い知ることができた。こうした成果を踏まえ、露米商會に代表される帝政ロシアの植民地経営と、同資料の技術選択や技術的実践との関係性の追究を試みる。

まず、同資料の船体は、全長に比して極端に全幅の狭いことから、高速の航行スピードが得られる利点の反面、海上での安定性に欠けるというものであった。つまり、同資料のプロポーションは、安定性を犠牲にしてスピードを得ることを優先、選択した結果と認識できる。

しかし、アリュートによるバイダルカでの航海は、必ずしも特定の目的地に向けた短距離移動のみを前提とするものではなく、狩猟時の海獣の探索や追跡あるいは他地域への往来などで、比較的長時間かつ長距離の移動を要することが決して稀ではなかった [Oshima 1996 : 87]。とすると、なぜ同資料を含むアリュート製バイダルカは、安定性を犠牲にしてまで、スピードを上げるためのプロポーションを選択しているのか、という疑問が湧いてくる。これに対して、そうした選択は、アリューシャン列島においてアリュートなど周辺地域の先住民を酷使して海獣毛皮狩猟を行っていた、露米商會を中心とするロシア商業資本の要請に由来する、という可能性が提起できる。

周知のように、ロシアが北米大陸に進出した最大の目的は、ラッコやアザラシなどの毛皮を清朝期の中国市場に供給することによって、巨大な富をもたらす毛皮取引を独占することにあつた [Veltre 1990 : 176 ; Fisher 1996 : 123]。ただし、ラッコやアザラシの捕獲には、熟練を要する高度な狩猟や航海の技術が求められるため、その生産・供給はアリュートや太平洋岸のエスキモー系の先住民に依存せざるをえなかった [Townsend 1975 : 563 ; Crowell 1997 : 13]⁽¹¹⁾。このため、アリュートは、毛皮取引品生産としてのラッコやアザラシの狩猟を、露米商會などに強制されることとなった [岸上 2001 : 306]。

上記のような植民地的状況は、バイダルカの使用にも大きな変化を引き起こした、との推測を導くことができる。というのも、この状況下では、生存のための生業活動としての狩猟を行うことも、生活財や威信財を得るために遠方に航海に出掛けることも、露米商會などの植民地権力によって制限され、アリュートなどの先住民はもっぱら取引品生産としてのラッコ猟などに強制的に従事させられていたからである [岸上 2001 : 306-307, 312]。

くわえて、こうしたバイダルカの限定的な使用は、長距離移動の必要や機会を相対的に低下させることになる。まず、毛皮取引品であつたラッコやアザラシは、その生態・行動や比較的小型であることから、大型の海獣類などに比べて狩猟が容易なことに加え、長距離・長時間を要するような探索や追跡の必要がなかつた [ラフリン 1986 : 66, 81-82]⁽¹²⁾。また、決してアリュートが自ら望んだ結果ではないが、ロシアの植民地支配は、さまざまな生活物資・食料・嗜好品を彼ら彼女らの

社会にもたらしたため [岸上 2001 : 307]、わざわざ遠隔地まで交易に出掛ける必要や動機を低下させた可能性がある。

以上を是認するならば、函館市北方民族資料館のバイダルカのプロポーシオンは、露米商会などの植民地支配によって、長距離移動の必要性が低下し、特定の小型海獣の狩猟に限定されたため選択されたものとなる。とりわけ、毛皮交易品であったラッコやアザラシは、比較的容易な狩猟対象であり、長時間・長距離を要するような追跡・捕獲の必要性も低いため、発見した獲物に素早く近づくことを最優先の選択肢とすることができる。さらには、比較的短距離であれば、安定性は船体性能によって確保しなくとも、アリユートの操船技術で対応することができた [ラフリン 1986 : 84-85]。こうした背景によって、安定性よりも高スピードを得るため、同資料は、極端なまでに船幅が狭く船長が長いプロポーシオンを選択できた、との想定が成り立つ。

ところで、同資料の安定性は、前述したように船腹構造に側面からの衝撃や圧力に対処するための構造的工夫が施されていないこともあり、横波や横風を受けると転覆する危険性を大いに孕んでいた。ただし、船首や船尾に関しては、前後からの衝撃や圧力を受けても、それを分散・緩和し破損や転覆の危険を少なくする構造となっていた。このような構造は、アリユートによる毛皮交易品生産の海獣狩猟が、波風の立つ荒天の場合でも——植民地経営によって強制され——行われていた [ラフリン 1986 : 84] ためである、と推察される。もっとも、その是非にかかわらず、アリユートの船は、前後からの波風に対しては造船技術によって、左右からの波風に対しては操船技術によって、それぞれ対処する設計思想を選択し製作、使用されていたことは確実である。

むろん、これはアリユートの造船・操船技術があったからこそ採りえた設計思想ではあるが、その選択にも植民地支配の影響は決して皆無ではなかっただろう。というよりも、もし露米商会などが、波風の高い荒天下での海上狩猟を求めなかったならば、わざわざ同資料を製作あるいは運搬し、アリユート列島から遥かに離れた中部千島で使用する必要など少なくともなかったはずである。

いっぽう、前章では、コックピットの形態・構造から、同資料が通常のアリユート製バイダルカと異なり、所有者である特定個人の身体に合わせてオーダーメイドで製作されたものではなく、不特定多数の人物が搭乗することを前提にレディーメイドで製作されたものである可能性を指摘した。この可能性もまた、ロシアの植民地支配の影響を窺わせる特徴と見なすことができる。取りも直さず、それは、三連座のバイダルカの中央座席が植民地行政官などを乗せることを前提としたものだからである。つまり、前後のコックピットは別としても、少なくとも中央コックピットの座席は特定の人物に合わせて設える必要性は極めて低かったはずである⁽¹³⁾。

これに加え、同資料では、前後のコックピットのデッキ・ビーム（甲板梁）も、中央のものと同じ幅で均等に配置されていた。このように、同資料は、特定個人が搭乗するものではなく、不特定多数の人物が搭乗することを前提としていた蓋然性が高くなる。さらには、同資料の収集地が、中部千島のシムシル島であったことを想起するならば、その搭乗者はアリユートですらなかった可能性も否定できなくなる。なぜなら、同地では、コニアグ・エスキモーや千島（クリール）アイヌも露米商会の経営下で毛皮交易品生産のための海獣狩猟に従事させられていたからである。

もっとも、前章でも指摘したように、アリユートのバイダルカの操船技術や海上での狩猟技術は、幼少期からの訓練によって習得された身体技法であるため、エスニシティを異にする人物が搭乗しても、同じような活動・貢献はできなかつたかもしれない。だが、同資料が三連座であることを加味すれば、たとえば狩猟を担当するのがアリユートで、航行のためにパドルを別のエスニシティの人物が漕ぐことなども可能となる。あるいは、二人の漕航者の内、アリユートがメインで操船し、別エスニシティが補助でパドルを漕ぐことも、まったくあり得ない想定ではないだろう。

いずれにせよ、同資料は、植民地支配が作り出した複数の異文化集団の混住的状況のなかで使用されていたことに疑いはない。そういった意味でも、同資料がレディーメイド製であることもまた、露米商会の経営下で製作、使用されていたことと無関係ではなかつたろう。

これまでの議論によって、同資料の船体形態・構造は、単に環境適応や文化伝統などによるもののみならず、露米商会などに代表されるロシア帝国主義による植民地経営の影響を受け選択された結果である可能性を窺い知ることができた。またそれは、植民地権力によって要請された技術選択と言い換えることができるものであった。

くわえて、本稿では、造船や操船にかかわる技術的実践を、徹底的に人間の身体活動として読み解くことによって、それを製作・使用した人びとが置かれていた社会状況や生活形態の復元を試みた。このため、ここで明らかにした結果は、単なるモノとしての資料の特徴でも、それを生み出した抽象化された制度でもなく、当該社会の人びとが植民地支配に強いられた社会的実践の一端にほかならない。そういった意味で、本稿は、非言語資料による過去の社会の営みを読み解いた、といっても過言ではないだろう。

以上のように、本稿では、従来、巨視的に語られがちであった植民地経営や帝国主義などを、個人の社会的実践レベルのなかに見出すことができた。そして、それは文献史料ではなく、民具という非言語資料を対象として導き出したものである。こうした成果は、人類学が切り開くことができる、新たな歴史研究のフロンティアと見なすべきだろう。と同時に、長らく人類学が等閑視してきた、民具研究に秘められた可能性でもある。

注

- (1) この指摘は、必ずしも当該社会が「無文字社会」であることを前提とするものではない。というのも、その社会が独自の文字を持っていたとしても、一般に文化／社会人類学が対象とするのは往々にして「中核」ではなく「周縁」であるため、当該地域の人びとが文字で自らの歴史を記録している可能性が低いからである。なお、こうした傾向は、過去の被植民地のみならず、現在の途上国や先進国の地方にも当てはまるだろう。たとえば、日本では、地域行政ごとに「市町村史」がほぼ編纂されているが、それが地域の人びとと自らが遺した歴史記録か、と問われれば重大な留保が必要だろう。
- (2) もっとも、民具は、文化／社会人類学などで長らく等閑視されてきた物質文化研究の対象であった [大西 2009 : 152-156 ; 2012 : 28-29]。このため、民族誌調査に基づく人類学が、民具資料を積極的に研究対象としてきたわけでも、その分析のための方法論を洗練させ他分野に秀でたレベルのものを保持しているわけでもない [大西 2012 : 29-30]。なお、人類学の隣接領域として民具研究があるが、そこではモノの形態や使用に関わる分類や使用法が主要な議論であり、植民地主義などの歴史を積極的に読み解こうとする姿勢に乏しい。
- (3) 黒田清隆による千島巡検に関しては、随行した開拓使八等出仕の佐藤秀顕が記録を遺している [佐藤 1875]。そこでは、中部千島のウルップ島でラッコ猟に使用される海獣製の皮船を実見し、同資料を一艘購入したことが記録されている。
- (4) アリュートは、ロシア人によって名づけられヨーロッパ系の人びとが使った他称であり、自らはウナンガン (Unangax̄, Unangan, Unanga) という自称を使っている。
- (5) 露米商会は、1867年、アラスカがアメリカ合衆国に売却されたことにともない、その活動を停止する。だが、その後も、露米商会に移住させられた先住民は、千島樺太交換条約締結によってロシア国籍を選択してペトロパブロフスク・カムチャツキーに移送される 1877年9月まで、北千島や中部千島に留まり毛皮狩猟に従事させられていた。
- (6) コニアグ・エスキモーは、アラスカ半島やコディアック島に居住していたユピック系先住民である。その言語は、アリュート語と異なり、エスキモー諸語に分類される。なお、アリュートは、エスキモー諸集団と少なくとも9千年前に分岐した、という形質人類学の研究成果が提示されている [ラフリン 1986 : 24]。
- (7) ただし、アリュートのなかには、コディアック島に移住していた集団もいたため [宮岡 1985 : 143]、エスニシティを混同しないならば「コディアック島のアリュート」という表現は必ずしも間違いではない。
- (8) いうまでもなく、本稿の内容に関する責任の一切は、筆者が負うべきものである。だが、ここで提示する技

- 術的特徴は、ひとえに共同調査者である洲澤なしでは決して得ることができなかった。このため、ここでは、調査成果のプライオリティの所在を明示するとともに、記して洲澤に対する謝意としたい。
- (9) アリュート製バイダルカの「乗り口」が楕円形を特徴とするのに対し、コニアグ・エスキモー製やチュガッチ製のバイダルカの「乗り口」は円形の形状を呈する [大矢・洲澤 2013 : 14]。
- (10) 子ども時代からの長期の訓練は、単に「投げ足 (伸膝)」姿勢で搭乗・操船することに止まらず、この搭乗姿勢のままバイダルカから投槍器によって離頭鉞を投てきし、海上の獲物を仕留めるための筋力や柔軟性の習得を目的としたものであった [ラフリン 1986 : 56-63]。
- (11) 現地の先住民が徴用された理由として、好天下の風海ならばヨーロッパ系の植民者でもバイダルカを巧みに操ることができたが、バイダルカに搭乗したままでの海獣狩猟や荒天の海での操船などは、アリユートに頼らざるをえなかったことがあげられる [ラフリン 1986 : 84]。
- (12) たとえば、捕鯨や大型海獣猟などの場合、鉞頭が獲物にヒットしたとしても、そこから引き上げ捕獲するまで長時間あるいは長距離の格闘が往々にして必要になる [ラフリン 1986 : 64-67]。
- (13) もっとも、ある三連座のバイダルカの中央座席に、常に特定の植民地行政官が座る可能性は完全にはゼロではない。だが、民族誌を見る限り、そうした事例は認められず、むしろジェームズ・クックが第3次航海でアリューシャン列島を訪問した際に、その交渉役として上陸しようとしたジョン・レッドヤードが三連座のバイダルカの中央に乗せられた、との記録がある [ラフリン 1986 : 230-231]。ここから、三連座のバイダルカの中央座席は、不特定多数の人物を搭乗させることを目的としていたことが窺える。ただし、レッドヤードは、座ったのではなくバイダルカの底に寝かされて乗せられたようである。

参考文献

- 馬場脩 1943 「千島に於けるアリユート族」『民族学研究』1(9) pp. 877-890
- Crowell, A. L. 1997 *Archaeology and the Capitalist World System: A Study from Russian America*. Plenum Press
- Fedorova, S. G. 1973 *The Russian Population in Alaska and California from the Late Eighteenth Century to 1867*. University of Alaska Press
- Fisher, R. 1996 "The Northwest from the Beginning of Trade with Europeans to the 1880s." B. G. Trigger and W. E. Washburn (eds.) *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas Vol. 1: North America Part 2*, pp. 117-182 Cambridge University Press
- 長谷部一弘 2003 「アリユートの皮舟」『北太平洋の先住民交易と工芸』大塚和義 (編) pp.158-162 思文閣出版
- Hearth, J. D. 1987 "Baidarka Bow Variations." *Faces Voices and Dreams*. Alaska State Museums and the Friends of the Alaska State Museum
- Jochelson, W. 1933 *History, Ethnology and Anthropology of the Aleut*. Carnegie Institution of Washington
- Kawada, J. 1991. Notes on "the techniques of the body" among West African People. *Journal of The Anthropological Society of Nippon*, 99(3), pp.377-391.
- 川田順造 1992 「身体技法の技術的側面」『西の風・南の風：文明論の組みかえのために』 pp.64-122 河出書房新社
- 岸上伸啓 2001 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について：毛皮交易とその諸影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3) pp.293-354
- Lantis, M. 1984 "Aleut." *Handbook of North American Indians, Vol. 5, Arctic*. D. Damas (ed.) pp.161-184 Smithsonian Institution
- ラフリン, W. (Laughlin, W. S.) 1986 『極北の海洋民アリユート民族』スチュアート・ヘンリ (訳) 六興出版 (1980 *Aleuts: Survivors of the Bering Land Bridge*. Holt Rinehart & Winston)
- モース, M. (Mauss, M.) 1976 「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』有地亨・山口利夫 (訳) pp.121-156 弘文堂 (1936 *Les Techniques du Corps. Sociologie et Anthropologie*. Presses Universitaires de France. Paris, France.)
- 宮岡伯人 1985 「A. ピナールと極北諸言語関係資料」『北方文化研究』17 pp.141-164
- 大西秀之 2003 「柄の記憶：木工におけるアイヌの人々の身体技法の歴史」『民具マンスリー』36(4) pp.11-18
- 大西秀之 2007 「フィリピン・ルソン島山地民の土器製作技術の一考察：語りえぬものの民族誌に向けて」『土器の民族考古学』後藤明 (編) pp.27-41 同成社
- 大西秀之 2009 「モノ愛でるコトバを超えて：語りえぬ日常世界の社会的実践」『フェティシズム論の系譜と展望』田中雅一 (編) pp.149-174 京都大学学術出版会
- 大西秀之 2012 「序：技術をモノ語る苦難と悦楽」『文化人類学』77(1) pp.27-40
- Oshima, M. 1996 "Subsistence and Culture of the Aleuts as Island Dwellers: Ethnographical Viewpoint." *The 10th International Abashiri Symposium: Peoples and Cultures in the Northern Islands*. pp.85-94 Hokkaido Museum of Northern Peoples

- Oswalt, W. H. 1980 *Kolmakovski Redoubt: the Ethnoarchaeology of a Russian Fort in Alaska*. Los Angeles: Institute of Archaeology
- 大矢右京・洲澤育範 2013 「市立函館博物館所蔵 “Three Hole Baidarka” の製作技術に関する一考察」『市立函館博物館研究紀要』23 pp.9-16 市立函館博物館
- 佐藤秀顕 1875 『千島紀行』函館市中央図書館蔵
- 下山晃 2005 『毛皮と皮革の文明史：世界フロンティアと掠奪のシステム』ミネルヴァ書房
- Townsend, J. B. 1975 “Alaskan Natives and the Russian-American Company: Variations in Relationships.” J. Freedman and J. H. Barkow (eds.) *Proceedings of the Second Congress, Canadian Ethnology Society Vol. 2* pp. 555-570 National Museums of Canada.
- 手塚薫 2011 『アイヌの民族考古学』同成社
- Veltre, D. W. 1990 “Perspectives on Aleut Culture Change during the Russian Period.” B. S. Smith and R. J. Barnett (eds.) *Russian America: The Forgotten Frontier* pp. 175-183 Washington State Historical Society
- Veniaminov, I. 1840 (1984) *Notes on the Islands of the Unalaska District*. Limestone Press

付記——本稿の民族表記に関して

脱稿後、本論集編集部より、本稿における民族表記の是非を問う問題提起を頂いた。とくに、「エスキモー」は、差別的な意味が込められている——との見解がある——他称のため、今日では自称である「イヌイト」に言い換えることが一般的ではないか、という主旨の御質問であった。

しかし、本稿で「コニアグ・エスキモー (Koniag Eskimo)」と表記した集団は、本文の注6でも明記しているように「ユピック (Yupik) 系先住民」であり、「イヌイト／イヌイト (Inuit)」とはエスニシティを異にするグループである。しかも、「ユピック系先住民」が「イヌイト／イヌイト」と異なることは、学術レベルに限定されるものではなく、当事者が——むろん全員がという特定は絶対にできない／すべきではないが——政治社会的に主張・承認している。したがって、もし本稿の「エスキモー」の表記を「イヌイト／イヌイト」に書き換えてしまうと、当該地域の先住民系の人びとに関する「間違った」知識に基づく誤記となってしまう。

いっぽう、上記の問題とは別に、「コニアグ・エスキモー」のみならず主題として取り上げている「アリュート」を含め、本稿ではエスニック・グループの多くを自称ではなく他称で表記している。この理由は、本稿が依拠する民族誌や学術論文の原典の引用であることに加え、それを修正せずそのまま使用しているのは歴史的記述だからである。具体的には、今日、自称として使用されている民族名が、果たして本稿が議論している植民地統治期にも同様に使われていたのか、またもし仮に同時代に使用されていたとしても、それが現在の自称で指示される人びととまったく同じ集団なのか、という歴史的事実に関する疑問から、自称ではなく他称を——決して積極的にではなく消極的に——選択した。

もっとも、この選択に対しては、さまざまな異議や批判が提起されるだろう。だが、過去から現在まで例外なく、どんな「民族」集団も、歴史的に形成されたものに過ぎない。とくに、「民族」集団が「万世一系」的に不変の存在など見なしてしまうことは、歴史的事実の誤認であるのみならず、少なからず政治社会的な惨禍を引き起こす危険性を孕んでいる。くわえて、安易な歴史的記述の書き換えは、過去にあった差別や搾取などの過ちを隠ぺい忘却してしまう危険にも繋がりがねない。

以上が、本稿における民族表記を選択した理由である。ただし、これが十全な選択であるとは、筆者自身まったく考えていない。なによりも、学術的にも政治社会的にも、すべてを満足させる民族表記などないだろう。また、現在の「正しい選択」が未来に「間違った選択」になり、現在の「間違った選択」が未来に「正しい選択」に変わる可能性は大いにある。そういった意味で、民族表記の選択は、アカデミズムに身を置く一研究者としても、一般社会に暮らす一個人としても、常に対峙し配慮してゆく必要性を今回改めて確認した。